

わることなく続けられればよいと思う。

OR情報交換室は設置目的がいまひとつ行きわたって  
おらず、完全な活用とはいかなかったように思う。ただ、

従来の休憩室と異なり、椅子と机がある自由に使える部  
屋という意味で、重宝したという観もある。

(片山直登, 松井知己)

## 第24回シンポジウム

# 『CIMとその要素技術——現状と課題』ルポ

平成2年9月22日、早稲田大学理工学部で第24回シンポジウム「CIMとその要素技術」が、CIM・FMSの管理技術研究部会がオーガナイザーとなって開かれた。150名近くの参加者を集め非常に盛大なシンポジウムであった。

まず発表に先立ちCIM・FMSの管理技術研究部会主査の青山学院大学黒田充氏より、研究部会発足の経緯や活動内容の紹介が行なわれた。この中で黒田氏はFMS・CIM化の現状にふれ、今日のCIM化の進展はきわめて急速なものであり、より高水準のCIM構築を目指して多くの研究機関や企業が研究開発活動を盛んに行なっていると述べられた。また日本がCIMの管理技術分野では世界的にトップクラスであると述べ、この分野の研究を今後ますます発展させていく必要があると述べられた。

つづいて、5件の発表が行なわれた。

「CIM構築のコンセプト」福田好朗（機械振興協会）、  
「CIM構築とMRPシステム」中根勘一郎（早稲田大学）、  
「生産指示機能を持つ生産システム・シミュレータ」梅田茂樹（日本アイ・ビー・エム）、  
「待ち行列網による情報ネットワークと生産工程の解析」米田清（東芝）、  
「エキスパート・システムを用いた生産スケジューリング」入澤直樹（日立東北ソフトウェア）他、

福田氏「CIM構築のコンセプト」：CIMモデルの記述法とシミュレーション技術、CIM標準化の最近の動向について述べられた。福田氏は、今日までのさまざまなCIMのモデル記述法を紹介し、広い範囲で多面的にCIMをとらえるモデル化が重要であると話された。また、CIMのシミュレーションに際しては情報の結合状態や、情報と物の伝達タイミングなどの確認が主要な目的であると強調され、近年は構築されたシステムのシミュレーションを容易に行なうことのできる生産システム



シンポジウム

のモデル、あるいはモデル構築法の開発が必要とされていると述べられた。

中根氏「CIM構築とMRPシステム」：CIMとMRPのかかわりあいについて述べられた。中根氏は、MRPは生産ロジスティックシステムを構築するための基本的な構造を持っているとした上で、CIM構築に際しMRPコンセプトの導入は、システム統合化への有効な引金であると述べられた。さらにシステム構築の原則として、部分部分の小さな改良と全体的な規模での大きな変革の両方が必要であること、またシステム構造をシンプルにすることなどが重要であると述べられた。

梅田氏「生産指示機能を持つ生産システム・シミュレータ」：生産システム専用のシミュレーションパッケージMANMOSSを紹介された。このパッケージの最大の特徴は、「押し型」あるいは「引き型」といった典型的な生産指示方式が、シミュレーションモデルとして簡単に表現でき、さまざまなタイプの生産システムの構築・運用に活用できる豊富なモデリング機能を備えていることを示された。さらに、システムの実用性の検証結果などを示し、このモデルが十分に表現能力のあることを強調なさっていた。

米田氏「待ち行列網による情報ネットワークと生産工程の解析」：待ち行列網を使った生産工程の解析、また逆問題と呼ばれる最適化問題についても述べられた。待ち行列網は、情報の流れと物の流れを性能面から統一的に表現する言語であるとした上で、実際の解析例としてIC生産などの実例を示しながら述べられた。

入澤氏他「エキスパート・システムを用いた生産スケジュールリング」：多工程ジョブショップスケジュールリング・エキスパート・システム構築の実際を述べられた。入澤氏はエキスパート・システムのアプローチを通じて、

スケジュールリングの目的や評価尺度の整理・統合化が行なえると述べ、エキスパート・システムの有効性を強調された。

CIM管理技術というテーマで行なわれたゆえであろうか、非常に多くの参加者であっただけでなく、会場には実務に携わる方々の出席が目立ったように思えた。オーガナイザーの黒田氏の言葉にもあったように、まさに産学一体となった研究活動が行なわれようとしている分野であることを痛感した。

## “1990年度秋季研究発表会アンケート”集計結果

研究普及理事 小島 政和

平成2年9月23日、24日に早稲田大学で開催された日本OR学会秋季研究発表会に関してアンケート調査を行いました。ご協力ありがとうございました。その集計結果を報告いたします。

参加者数合計=362名

正会員：268，学生会員：33

賛助会員：39，非会員：22

研究発表件数=126件

招待発表：6，一般発表：88

特設セッション：28，ペーパーフェア：4

アンケート発送者数=332名

正会員：267，学生会員：31

賛助会員：24，非会員：10

回答者数=165名

企業関係者：52，大学関係者：102

学生：5，その他：6

回答者年齢層

20代：34，30代：50，40代：46

50代：14，60代：17，70代：4

興味の対象（重複を許す）

理論：117，事例：104，理論および事例：62

主たる参加動機（2つまで）

テーマ“未来の生産システム”：32

特別公演：38

特設セッションで発表：21，同参加：39

一般セッションで発表：49，同参加：53

都内で交通至便：20，休日：12

休・祭日で出張しやすかったから：9

その他：27

「研究発表会・学会に対する感想，要望，不満，希望するテーマ等」に寄せられたご意見は多種多様で，残念ながら，そのすべてをここにご紹介するわけにはいきません。比較のご要望の多かったご意見は以下の3つです。

(1) 研究発表会の開催は平日に……

私個人としても賛成ですが，“会場の都合で平日開催が非常に難しい”ということをご理解いただきたいと思っています。費用の関係で今回のように大学を利用させていただくことが多いのですが，その場合にはどうしても授業のない休日になってしまいます。

(2) 特設セッションは今後も続けて……

毎回行なうのは，オーガナイザーの候補者，テーマ等の関係で無理があるかもしれませんが，1～2年に1回位の割合ならば十分可能でしょう。

(3) 事例研究を含めて企業サイドの発表を多く……

特設セッションの1つのねらいは企業で行なわれているORを引き出すことにありました。少しは企業サイドの発表が増えたのではないかと考えています。今後も，企業の方々により多く発表に参加なさることを望んでいます。

最後になりましたが，このアンケートの作成および集計に際してはOR学会の関口事務局長，高橋さん，東京工業大学事務官の日暮さんにお手伝いいただきました。お礼申し上げます。